デッドオブオンライン

扉。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デッドオブオンライン

【Ｎコード】
Ｎ９１５５Ｚ

【作者名】
扉。

【あらすじ】
世界初ＶＲＭＭＯゲーム『デッドオブオンライン』。
このゲームに当選した主人公、椎名　夜宵はテストユーザーとしてログインした。
しかし、ゲーム開始から数時間後、システムの不具合を感じたプレイヤー達は
ゲーム　マスターから『ログアウト不可』と『この世界で命を落とすと死ぬ』という驚愕の事実を知る。
クリアは１００面までの攻略。

命を懸けるか、永遠にゲームの世界にとどまるのか。
運命を掛けたゲームの始まりであった。

椎名　夜宵／Ｎｉｇｈｔの決断は！！

２年後、ナイトは未だ、ゲームの中にいた。
ただいま、２年後編突入。

EP0　プロローグ

――2年前

「デッド・オブ・オンライン」

世界でトップと称されるゲーム会社が開発した新作となる、VRMMOゲームである。
発表の時点でネット上の噂となり、ひと時は社会現象にまでなるとTVでも紹介していたほどだ。

何しろ、実際に仮想空間へと行くことが出来るゲームだ。
VRMMOゲームというのは、作り上げるのは不可能とまで言われたのだが、世界一と称されるゲーム会社が数十年かけて作り上げたと言う。

そして、今宵　テストユーザーに見事当選した俺、椎名（しいなやよい）夜宵はゲーム好きだった。別に人好き会いが嫌いとかではなく、ただ単にはまってしまったと言うだけだ。

当たった瞬間は叫び、妹にこっ酷く叱られたのだがその辺は許してやろう。
お兄ちゃんは心の広い人で良かったな、我が妹よ！！

抽選に当たった俺は陽気に会場までの電車に乗り込んでワクワクと緊張を高めていた。
電車にユラユラと揺れながら目的の会場までの時間を過ごしてい

ると。

「自分もテストユーザーか？」

隣に座っていた少年がそう言ってきた。　俺はそいつの方を向くと

「ああ、お前もテストユーザーなのか？」

「そうや。ワイはこの為にわざわざ大阪から来たんやでぇ」

「その妙にウザったいのは大阪弁のせいか」

「大阪弁をバカにしたらあかんぞ！！　全大阪人を敵に回すでぇ」

「はいはい。で、お前誰だ？」

少年はぽかーんと俺の方を見ると、アハハと陽気に笑って自己紹介をし始める。

「ワイは龍吾　来栖（くるすりゅうご）　龍吾や、よろしゅうなぁ」

「ああ、俺は椎名　夜宵だ」

「椎名　夜宵……なんか、ごっつカッコいいな。ワイの名前と交換して」

「嫌だ」

「つれないなぁ」

関西弁少年、来栖は気さくな奴っぽい。

こう言う奴が、いい成績を収めることも少なくないな・・・

「なぁ　アンさんもワイらと組まへんか？」

「組む？」

「そうや。ワイ、テストユーザーに当たった人、３人くらいと丁度知り合いで組もうって話してた所やねん」

「ふーん」

ああ、成るほど。
ふむ。それは悪くない話だろう。

「気が向いたらな」
「ありがとな。椎名は話しやすくてよかったわ」
「話しやすい？」
「ああ、さっきも別の人を誘ったんやけど・・・」

来栖はそう言って電車の奥の人を指した。
そこには白髪の少年が眠っているようにして座っている。

「あの人、何度話しかけても無視や、無視」
「そりゃぁ、寝てるからだろ？」
「そうとは限らへんでぇ。ワイが思うにあいつは『ソロプレイヤー』や」
「ソロプレイヤーね」

その言葉は良く知っていた。

ソロプレイヤー

どんな状況下の中でも1人でクリアしていく、いわば真の強さを求めている人。
こういう人が大体、1番初めにクリアしていく。
しかし、ソロプレイヤーは仲間がいない為、援護や回復などが出来ず多くのソロプレイヤーは早い段階であきらめていく。

「まぁ、あいつもテストユーザーだろ」
「そうやな、面白くなりそうや」

俺と来栖は【始まりの街】と言う、最初の街で待ち合わせということになった。

□■□■

用意された部屋へと1人ずつ入り、そこにぽつんとある椅子に腰をかける。
目の前にはヘルメットのようなものが置いてあり、それを被ると白い文字でこう綴られていた。

ユーザーを確認。

デッド　オブ　オンライン

Ｇａｍｅ　ｓｔａｒｔ

Ｅｐ１　ユーザー

Ｕｓｅｒ　ｎａｍｅを選択してください。

Ｕｓｅｒ　ｎａｍｅ：Ｎｉｇｈｔ

Ｕｓｅｒ　ｄａｔａを習得中……

習得完了しました。

初期装備を選択してください。

剣・太刀・大剣・双剣・杖

装備『剣』を選択。

タイプ『剣士』

こちらの設定でよろしいですか？

○はい

必要情報を確認……完了しました。

User name 『Night』さん

『デッドオブオンライン』へlog inを開始します。

□■□■

光が差し込んできた。
俺は自然と目を開ける。
そこにあった景色は――――普段では見られないであろう城内らしき場所であった。
周りを見渡す限りの人、人、人だらけだ。
どうやら、ここが『始まりの街』らしい。
『街』ってより『城』だと思うのは俺だけであろうか？

俺は自分の格好を見た。

「なんか……全体的に黒すぎだろ？」

全身黒。
黒のブーツに黒のズボン。
そして黒のシャツに黒のネクタイ。
ご丁寧に黒のマントまで羽織っていた。
唯一黒ではない部分は両肩からズボンに向けての2本の線と横を通る線のみ。

「なんですか？　あれか、いじめか」

そんなことを呟いていると、誰かに肩を叩かれた。
そちらの方へ目を向けると、

「お。元気しとったか。椎名……ん？　この世界では『ナイト』か」

「お前、誰……もしかして、来栖か？」
「そうそう。来栖や来栖。なんか、ごっついでかいバンダナまかれてよー前が見えんわ」

頭に巻かれたバンダナを上に直す来栖。
その腰には『太刀』があった。

「なんか、ナイトとワイじゃ姿全く違うな」
「……ってか、なんで俺のユーザー名わかるんだ？」
「あれ？　知らんの？　チュートリアルみなかったん？」
「チュートリアル……いや、そんなのは無かったが」
「まぁいい。左手にブレスレットあるやろ？」
「ああ」
「そのブレスレットに意識を込めるんや」
「意識を込めるって———あ、出来た」

ブォンと音と共に目の前に薄い画面が表示された。
そこには『装備』『アイテム』『容姿』…などが書いてある。

「な、わかりやすいやろ？」
「ああ。と、いうよりこの世界でも顔は変わんないんだな」
「そうやな。ワイはこの顔結構気にいっとるからかまわへんけどな」
「まぁ」

俺も別に顔に不自由はしていない。
少し女顔ってのが少し気にくわないが……と、いうよりこの服について問いただしたい。
それより、何故、来栖……あ、この世界だと『クルス』か
名前はどうした、名前は。

「ワイの服、カラフルでいいやろ？」
「モンスターにあっさり見つかって死んでまえ」
「そない、つれないこと言うなよ」
そんなこんなで俺は来栖と少し戦いに行ってみることになった。

□■□■

あれから数時間、どちらかが死んでは街へ戻って回復し、また戦闘をしに行くと言う、現実的レベル上げをしていた。

「クルス」
「なんや、ナイト」
「お前、知り合いがどうとか言ってなかったか？」
「ああ、それならかまへんよ。ワイのフレンドになってるさかい。いつでも連絡可能や」
「フレンド？」
「そうや、画面だしてみぃ」
俺は徐に画面をだす。
画面を下へスクロールしていくと、『友達』という項目があった。
「それでワイが申請書を送る……と」

クルスはメールで何かを送ったらしい。
しばらくすると、俺の画面に『クルス』と大きく描かれたメールが送られてきた。
「中、開いてみぃ」
メールの中を開くとクルスが友達申請をしています。許可しますか？
ＹＥＳ
ＮＯ
と、文字が書かれていた。
俺はためらいなくＹＥＳのボタンを押す。
すると、画面は光って次の途端『友達』の項目に『クルス』が登録された。
「この友達申請には得が合ってな。どんなに離れていても通信が取れる」
「なるほど、それで俺と居ても平気なわけか……」
「そう。後、申請出来るのは互いに画面を開いている状態で２ｍ以内や」
「そうか……」
「まぁ、チュートリアルに書いてあるけどな」
カハハと笑いだすクルス。
俺は初めての『友達』を得た。

□■□■

あれから随分と時間が経って、この場所ではもう死なないくらいにレベルがあがった。

「一旦、街に戻るか」
「それもそうだな」

俺達は剣を戻すとゆっくりと街へと向かって歩いて行った。

現在、街で起こっている騒ぎなどまだ知らなかった。

Ｅｐ２　ログアウト不可（前書き）

椎名　夜宵／Ｎｉｇｈｔ

＞ｉ３７９３３－３８８４＜

上手く描けねっす。

EP2　ログアウト不可

ピピィッ

クルスは画面を開いた。
俺は横から覗き込むと、そこには高校生であると予想される少年がせっぱつまった表情で何かを伝えようとしていた。

「クルス」
「こいつはワイの仲間や、心配すな。それよりも・・・」

クルスは冷静にその人に対して、話しかけた。

「どうした？　なにかあったんか？」
「クルス！！　今、どこにいる」
「どこって……街外れやけど」
「今すぐ戻ってくれ！！　Ｇａｍｅ　Ｍａｓｔｅｒから話があるって！！」
「ｇａｍｅ　ｍａｓｔｅｒ？」
「ああ、なんでもログアウトが出来なくなってるようなんだ！！」

俺はクルスの仲間に言われた途端、画面を開いてログアウトボタンを押した。
しかし、ログアウトは出来ず何も変わらなかった。

「ホントだぞ、クルス……」
「どうせ、バグでも起こしたんやろ？　とにかく街に行ってみるわ」
「ああ、頼んだぞ。俺達は街の中心にいるからな」

通信はそこで切れた。
俺達は目を合わせると、急ぎ足で街へと走って行った。

□■□■

街へ入ると、絶句した。
目の前の光景が嘘であると信じたかった。
城の手前、広場の中心に体長２０ｍもあろう巨人が立っていたからだ。

「あれはホログラムや。恐らくゲームメーカーの仕業やろ」

ホログラム？
そう見てみると、うっすらと消えかかっている部分があるのが分かった。
じゃぁ、何故、こんなに大きなホログラムを必要とするんだ？

「何か始まったぞ」

俺がそう呟くと、体長２０ｍは在ろうホログラムが喋りだした。

「ああ、聞こえているか。ユーザーの人々よ。私はこのゲーム、デッドオブオンラインを作った責任者の石原だ」

石原。　このゲームを作った創始者。

「簡潔に言おう。お前達はこの世界（バーチャル）から出れない」

ここに集まっているであろうテストユーザーの1人が声を上げた。
それに続くように野次が石原めがけて飛んでいく。

「まぁ、落ち着け。面倒な事は嫌いなのだよ。私は、必要な事だけ言う。1度だけだ、よく聞いておけよ。この世界は、仮想空間だが、君達の体は仮想ではない。この世界での死は、現実での死となる。HPは、自分の命と同様だ」

淡々と惨い事を言う石原。
俺達はただ静かに聞いていただけだった。

「後は……そうだな。1番の目的を言うのを忘れていた」

1番の目的……？　なんだ、それは。

「あそこの塔。みんなの所からでは見えないか・・・・・」

体長２０ｍもある石原はそう言った。

「後で、画像でも貼っておこう。塔、通称。《アースランド》　あの塔の最高部、たしか……１００面だったかな？　１００面まで来れたのなら、君達、生き残っている全員を元の世界へ戻してやろう」

「１００面、そんなの無理だ」

誰かがそう呟いた。

その瞬間、不幸の伝染病のように人へまた人へと移っていく。

「ああ、この世界で死んだら向こうの世界でも死ぬ。これは嘘ではないよ」

「じゃぁ向こうの世界にある俺達の体はどうなるんだ！！」

誰かがそう言った。

すると石原は大きいホログラムの手を広げて

「大丈夫、近々、我々が管理している大病院へ君達を輸送させてもらうよ」

「か、家族だって・・・・・・心配する」

「その辺についても大丈夫だ。テストユーザーの家庭には少なからず1千万の慰謝料を払うつもりだ。金で動かない人間などいないのだからな」

俺はその言葉に怒りを持って、言葉にした。

「ふっっっざけるなぁぁぁぁ！！！」

少しざわめきかけていた街は俺の言葉で静けさを戻す。

「金で動かない人間はいない？　ざけんなよ！！　俺の家族をなんだと思ってんだ！！」

そうだ、そうだ。と周りの声が大きくなる。
すると、石原は即決にこう答える。

「さぁ。私はただ君達に欠けているだけだよ。人生ってやつを」

俺達は何故か、その言葉で静かになってしまった。

「向こうの世界では人を殺せば殺人罪。物を焼けば放火罪。物を壊せば、器物破損罪だ。しかし、どうだろうか？　この世界ならモンスターを殺しても罪に問われる心配はないし人を殺しても、罪にはならない。私は君達を使って人間の本性を知りたいのだよ！！」

誰も言い返せなかった。

「では、失礼するよ。１００面頑張ってくれたまえ」

石原はそう告げると、きらきらと欠片になって消えていった。と、同時に死と隣り合わせのゲームが始まった。

このゲームのタイトル

『ｄｅａｄ　ｏｆ　ｏｎｌｉｎｅ』の意味が分かった気がする。

□■□■

メールが１通、届いた。
しばらくザワザワと街を覆った。
クルスは思い出したかのように手を叩く。

「そうや、ワイ　待ち合わせしとったんや」
「そう言えば、そう言ってたな」

あの通信をいれた少年も仲間だろうか？

「ナイト、来るか？」
「いや。お前の仲間って言うのは結構な信頼度で結ばれてんだろ？」
「まぁ、色々なゲームやってる仲やからなぁ――あ、自分気まずいとか思ってる？　そんなのは全然気にせんでえぇよ。ワイの仲間達はそんなに気にせんから」
「いや、俺が思っているのは違うよ」

俺は短く告げると、クルスから離れた。
そして、最後に

「短い間だったけど、お前といれて楽しかったぜ」
「そうか！！　死なないで出会ったらコーヒーでも奢ったるさかい」
「そん時はありがたく、御馳走になるよ」

俺はクルスと別れてため息を付いた。
画面を開くと、現在のプレイ時間と最高面数が記録されている。
どうやら、もう進んでいるらしい。
プレイ時間は１０時間ちょっと。

「よしっ！！　レベル上げたら行くか。《アースランドへ》」

俺は頬を叩いて気合を入れると街の外へと踏み込んだ。

ＥＰ３　黄色髪の少女

あれから数日経ったが一向に面は攻略されず２面止まり。
俺は始まりの街で宿を取っていた。

ひしひしと伝わってくる。
現実感
結局、ログアウトは出来ず仕舞い。

よし……
落ち着いた。　進もう。

１００面を攻略しないと出られないという事実を訊いたがいまいち、実感はわかない。が、しかし進まなくてはその事実が真実だということもわからない。
とにかく、今は進もう。

数日経ったせいか、半数の人は落ち着き始めた。
しかし、その反面　絶対に信じまいとワザと投身自殺をして向こうの世界へ帰ろうと、試みた者もいる。　そのプレイヤーは結局帰ってこなかった。

死んだ者は城の中庭にある石碑にユーザー名が書かれるのである。
昨日、見に行ったところ２０．３０人は死んでいた。
理由は半数が投身自殺。
もう半数はレベルを上げようとしてモンスターに殺された者だ。

俺は向こうの世界に変える為にも着実に１００面へ進まなければ

ならない。
まず手始めに防具を揃えようと思った。
しかし、現在の所持金は２０００Ｇ　この宿、たけぇよ。
街の外へ出て、モンスターを倒してレベルを上げて、その繰り返しだった。
そして、１つ奇妙な物が俺のメール箱に届いていた。
差出人は『なし』
内容も
『汝の色。理解する時、己は自然と強くなるであろう』
と、昔の手紙のような感じで書かれていた。
色？　なんだ、それは？　と、理解に苦しんだ時間もあったが、そんな暇はないと思い今日もモンスターを刈りに出かける。

□■□■

宿の屋根の上で街の外へ向かって走るナイトを見ている人物がいた。

「どうよ。アイオ」
「駄目ですね。まだ、気づいていないようだ」
「ふ……。今の内に死んでは困る存在だ。手助けは必要か？」
「否定します。あのプレイヤーはいずれ我々より強い存在になるはず」
「そうか……。それは見ものだ」

紅蓮の髪に咥えタバコの青年と空の色のように青い髪に首元にヘッドホンを掛けている少女はナイトを見てそう呟いた。

「それにしても眠いな」
「肯定します。朝早くすぎます」

2人はため息を漏らすと、その場を去って行った。

□■□■

モンスターと戦う事数時間、結構レベルも上がったと思われる。

「はぁ……はぁ……疲れたぁ」

草原に横になる俺は流れゆく空を見ながらため息を付いた。
周りにはモンスターもプレイヤーもいない。

「・・・１００面か」

そういって《アースランド》を眺める。
高すぎて頂上は見えていない。
何処まで行けばいいんだ。

と、その時。　どこからか、悲鳴のような声が聞こえた。

俺はとっさに起き上がって辺りを確認すると、遠くの方で小さい少女がモンスターに、襲われていたのだ。

「誰か、助けてくださいー！！」

俺はとっさに助けようと走り出すが、もちろんそんな近い距離ではない。
このまま、行けば少女の元に着く前に殺されてしまう。

「こうなったら――――――――」

俺はそう言うと、画面をだして溜めに溜めたスキルポイントを使った。
割り当てたスキルは【速度スキル】

「割り当て数は――――――――――――――――３０だ！！」

画面に映し出されているポイント３０を【速度スキル】に移動させた。
その瞬間、なにかの技が覚えたと思われる効果音が鳴った。
そのままの状態で覚えたての技を叫ぶ。

「《アクセリング》」

俺の周りを風が包み込むように纏った。
そのまま少女の前まで走ってモンスターに蹴りを入れる。

「君、大丈夫か？」
「あ、ありがとう」
「少し離れてろ」
「は、はい」

少女は少し離れた位置でこちらの方を向くと、俺は腰にある剣を構えた。
モンスターは妙に荒立っている。

「はっ！！　ザコ獣が俺に勝てるとでも」

このモンスターはこの場所で何度も、何十、ヘタしたら何百と戦ってきた敵だ。
負けるはずはない。

「うォォォォォォォォ！！！」

猛突進してくる獣。
俺は剣を構えて、ぶつかると同時に横に避けると、獣の背後に回り込み一刀両断。
獣は欠片となって消えていった。

「大丈夫かい？」
「あ、はい。た、助けていただいてありがとうございます」
少女は畏まった様子で俺にペコペコとお辞儀をしてくる。
俺は画面をだして、ポーションというアイテムを取り出した。
「君、体力ないだろ？　これでも飲んでおいた方がいいよ」
「い、いえ。そんな、見ず知らずの方に助けていただいたばかりでなく。回復アイテムなんて……とんでもないです」
「でも、またモンスターに会ったら、君死ぬよ？」
「そ、それでも・・・」
手を横に振っていた少女は下を向いた。　俺は画面を操作すると
「君、画面だして見て」
「は、はい。わかりました」
少女は画面を映し出す。
すると、1通の手紙が届いた。
その手紙とは――――
「これで君と俺はフレンドだ。友達の誠意なら受け取るしかないだろ？」
少女はにまっと笑顔を見せると、画面の認証ボタンを押した。
「あ、ありがとうございます！！」
こうして、クルス以外に初めてフレンドが出来た。

□■□■

金髪……と、いうより黄色の髪に両側をリボンで結んだツインテール。
見た目は小学生高学年から中学生にかけて。
その少女のユーザー名は

「Ｙｕｉです」
「俺はＮｉｇｈｔだ。よろしくユイちゃん」
「は、はい。よろしくお願いします」

妙に縮こまったユイは俺の足元にピタッとくっついたまま街中を歩いている。
結構、動きずらい。

「ユ、ユイちゃん……ちょっと動きずらいんだけど」
「で、でも……こんな人込みの中にいたらユイはぐれちゃいます」
「でも……結構歩いたけど、全く進まないんだよね」
「ご、ごめんなさぃ」

シュンと肩身を縮めるユイ。
俺は頭を掻くとユイの手を繋ぐ。

「あ、な、ナイトさん！？」

「これなら、はぐれないでしょ？」
「は、はい……」
プシュゥゥと何かが沸騰する音が聞こえたのだが……
まぁ、とにかく俺は1度自分の部屋に連れていくことにした。

EP4　攻略

俺の部屋にユイを呼ぶと妙に緊張しているようだった。

「あ、あの……ユイ。お、男の人の家に入るの初めてで……」

「まぁ、変に緊張しなくても。この部屋はその内売り払うつもりだから」

「え！？　ってことは……」

「うん。俺はそろそろ上に行こうと思って」

別に売り払う必要はない。

どの面へ行っても転移扉（ワープゲート）と言う、魔法を持っていれば1度言った面の街はいつでも行き来可能である。

「それは残念です・・・」

「ま、いつまでもここにいちゃぁクリアなんて不可能だからさ」

「そ、そうですよね」

にや笑いをしているのがわかるユイ。

どうも俺が初めてのフレンドだったらしく、とても悔やんでいた。

「で、でもフレンドならいつでも会話とか出来るし……」

「ユイ。1人でとても寂しかったです。ここ数日でいくつもギルドは回ったんですが気の会う人がいなくて――」

少し涙声になっているユイ。そうだろう。

中学生くらいのプレイヤーは少ない。

それも女の子となったら全体の1割くらいしかいないだろう。

その中で見つけるとなっては至難の業だ。

「俺が気の会う子……探してやるよ」
「…え？」
「ユイちゃんが気の会う子が出来たら俺はここから去る。それならどうだ？」
「そ、それなら……」

胸に手を当てるユイちゃんは少し誰かに似ていた。

「じゃぁ決まりだ。今から、中学生ユーザーが所属しているギルドを探しに行くぞ」
「あ、はい！！」

俺とユイちゃんは一物の不安も残しながら部屋をでた。

□■□■

ギルドとは『ソロプレイヤー』では、心細いユーザーが複数人で、集まり集団で狩りをおこなうという場所である。

伝言板などにはギルド募集の紙が貼ってあったり、街中で勧誘したりと意外と真剣なのである。

俺はもちろんギルドに入る気はないと思うがな。
そうこうしている内に俺とユイちゃんは掲示板前までたどり着いた。

「あ、あの・・・」
「あった？」
「い、いえ。これ……」

ユイちゃんが指を指した髪には、元気な女の子が映っている写真が飾られていた。
俺はこの写真を見た途端、確信する。

「中学生くらいの女の子じゃないか」
「は、はい」
「ここにする？」
「い、一応行ってみましょう」

俺は掲示板にあった紙を破り取って、目的場所の街の中心に向かって進んでいった。

呆気なく、見つかった。
ユイちゃんと、歳が同じくらいの女の子がギルドにはいた。
そしてすぐに仲良くなった様子だ。

「な、ナイトさん。ありがとうございました」
「いいよ。フレンドなんだから」
「お、お礼がしたいので困った時はいつでも言ってください」
「うん。ありがとね」

最後までオロオロとしていた女の子だったなぁと俺はギルドを離れた。
最後まで手を振っていたユイちゃん。
いつか、あえるといいね。

□■□■

――――――――半年後

時間に時間が過ぎ、ただ漠然と日々を過ごしているだけとなっていた。
半年たった今も、状況は変わらず相変わらず《アースランド》の攻略は終わっていない。

変わったことは大きく分けて２つ。
１つ目は『ｎｏｅｌ（ノエル）』という、ギルドの飛躍的成長。
２つ目は『通り名』を持つ者の出現だ。
着々と進んで行く中で、俺はある光景を見た。

それは１７面
ゆらゆらと階段を上がっていくと、銃声が鳴り響く。
俺は警戒しながら、先に進んで行くとキラキラと欠片が宙を舞っている。

「こ、これは」

俺はそう呟くと、奥に１人血だらけで倒れている人がいた。

「だ、大丈夫か！！」
「う……ぅぅ」

体力は残り２　このままでは死んでしまう。
俺は急いで画面を開こうとしたが――その手は血だらけで倒れている男に掴まれた。

「な・・・」
「注意しろ……白髪の狙撃手（トリガー）に――――――――」

男はそう言うとキラキラと欠片になって消えていった。
白髪の狙撃手？
誰だそれは？

モンスターか？

それとも・・・

ユーザー！？

俺はとっさに近くにあった壁際へと身を寄せる。

あの人が言うには白髪の狙撃手。

拳銃使い（トリガー）

俺にとっては不利だな。

そう思いながら、警戒しながら階段を進んで行くと大きな扉が合った。

まるでこの先にボスが待ち構えているような

小さく隙間が空いていたのでそこを覗いてみると———

白髪の少年が血だらけで立っていた。

足元に見えるのはボスらしき者の死体。

そして、その死体はキラキラと欠片になって消えていった。

瞬間。

白髪の少年と目が合った。

俺はとっさに扉の横に隠れる。

コツ　コツ　コツと近づいてくる音が聞こえてきた。

俺は剣を握り締めて白髪の少年が出るのを待っていた。

が

いつまで経っても出て来なかった。

それどころか足音、呼吸さえ聞こえなくなり、俺は上に行ったのか？　と、扉をゆっくりと開けた。

刹那

銃声が部屋中に鳴り響く。

俺は【速度スキル】で鍛えた足を使い、なんとか、かわした。

俺は階段側に移動すると扉側には案の定、白髪の少年が立っていた。

右手には真っ白く返り血の付いていない銃を持っていた。

「ボクの攻撃を避けたのはお前が初めてだ。モンスターも人間の中でも」

「アンタは、人を殺したのか？」

「殺したさ。この世界では人を殺しても罪にはならないって言ってただろ？　1度実践してみたくてさぁ。やったら、消えちゃったんだよね。キレイに」

「てめぇ！！　人の命をなんだと思ってんだ！！」

「・・・人の命？　そんなのは1道具にすぎないよ。ボクの命もものお前の命も」

俺はその言葉を訊いた瞬間、何かが壊れた音がしたような気がする。

そして、いつの間にか飛び出していた。

「きなよ。ボクが綺麗に殺してやるよ」

ＥＰ5　白髪の狙撃手

狭いエリアでの遠距離の敵と戦うのは不利である。
俺は剣。
たいして白髪の狙撃手（トリガー）は拳銃（ガンナー）使い。
圧倒的に不利だった。
でも、体が怒りにまみれて思わず、飛び込んで言っていた。
こうなったら戦うしかない。

「いいね。いいね。ボクに立ち向かってくる人は初めて見たよ」
「うるせぇぇ！」

声を荒げて、斬りかかるが白髪の狙撃手はいとも簡単にかわした。
と、いうよりも…最初から来る位置がわかっていたような気もする。

「まずは1発目」

ダンッ

「ぐあぁぁぁぁぁぁ」

鈍い銃声が鳴り響く。
俺はとっさに右手を庇い、左手を撃たれた。
ＨＰも少し減っている様子。
まずい…このままだと、死ぬ。

「はぁ…はぁ…」
「おやおや。さっきまでの威勢はどうしたんだ？」

「うるせぇ」
「くはは…やっぱり、殺しはいいもんだ」
白い服を返り血で染めている白髪の狙撃手は銃を天井に向けるとそう言った。
俺は左手から出ている血を止血すると、片手で剣を握った。
剣では十分範囲内だが、どうにも隙がない。
「さぁ、もっとボクを楽しませてくれよォ」
「言われなくてもっ！！」
飛び出した。
その距離５０ｍもない、その近距離で俺は【速度スキル】を使った。
「《アクセリング》」
風を纏い、白髪の狙撃手に向かって斬りかかった。
確かに、手ごたえはあった。
剣にも血が付着し、少ないが白髪の狙撃手にもダメージを与えている。
それなのに・・・
「ぶはぁぁ――――――――ッ！！」
どういう事だ。

俺のＨＰが……減ってる。

「くははは…いいね、いいね。お前が初めてだ。ボクに攻撃出来た人間は」

「……こ、これは……ど、どういう……」

「簡単な話だ。ボクも使ったんだよ。その《アクセリング》ってやつを」

「なッ！？」

いつ画面を開いたんだ…

全く見えなかったぞ。

「その様子だと、何故画面も見ずに使えたのかって面だな」

く…お見通しってことか。

すると白髪の狙撃手は銃を懐にしまいだした。

何を考えているんだ……

「そうだな…そんじゃぁいいこと教えてやる」

「な…何のつもりだ」

「けッ。いいから訊いとけ…それとも今死ぬか？」

朱い瞳が俺をにらむ。

俺は負傷した左手を殴られた腹部を押さえて剣を構えた。

「おいおい。今から死ぬってか？　大丈夫だ。ボクは今の段階じゃ、お前は殺さねぇよ」

「…そんなの信じられねぇよ」

「けッ。そうかい…そうかい。なら、それでいい」

白髪の狙撃手はそう呟くと、俺に伝えるように話を始めた。
「この世界『デッドオブオンライン』にはなぁ、すっげぇ裏技があんのよ。その裏技ってのが、この世界に来たテストユーザーの中で選ばれた12人の奴にしか得られない物なんだとよ」
「お前が…その1人だと？」
俺がそう告げ口すると、白髪の狙撃手は笑う。
「そう…そうなんだよ。ボク、当たっちゃったんだよね。その12人の中に…」
「それで…その話が俺に何の関係があんだよ」
「あれれ？　ここまで来てわからない。もしかしてお前、バカ？」
「…成績はいい方じゃなかったな」
「そうかい、そうかい。なら教えてやんよ。お前、あの石原って奴が消えた後に、奇妙なメールが届かなかったか？」
「メール……」
ふと、思い出した。
たしか、あれは石原が去った後、宿で見た物だ…
何故、それをコイツが知っている……あ、まさか！！
「気づいたみてぇだな。おめぇは選ばれたのさ12人のチート級のプレイヤーによ」
「……そ、そんなわけ……だって、俺はおめぇにやられてんだろ？」
「そりゃそうだぜ…ボクとアンタのレベルの違いは一目瞭然だろ？」
言い返せない。
その通りだった。
こいつは確実に俺より1周りも2周りもレベルが高い。

「だからって、俺にその事実を伝える義理はねぇだろ？」
「ちげぇんだな。これがまた…ボクは強い奴と戦いてぇんだ。だから、その事実を言えばお前はもっと強くなるだろ？　簡単な理論さ」
「ここで俺を殺さなかったら…いずれお前を殺しに行くぞ？」
「来いよ、来てみろよ！！　ボクを楽しませてくれよ！！」

俺は叫ぶ白髪の狙撃手から少し離れて構えだす。
しかし、白髪の狙撃手は何もせずに笑っている。

「それと確証はもう1つ…お前、チュートリアル受けたか？」
「……いや。受けてねぇよ」
「そうかい。そうかい…なら、本物だ」
「だから、それがどんな意味に……」

と、その時。
銃声が鳴った。

「最後に1つ。ボクは画面（ディスプレイ）を出さなかったんじゃねぇ。出したことにお前が気づかない程速かったってだけだ」

白髪の狙撃手は俺に向かって銃口を向けた。
俺は剣を持ってガード体制を取る。

「これで生きてたら、お前を見逃してやるよォ」

そんな事を呟くと、画面を映し出した。
俺も最近、覚えたこの技を使ってみようと、画面を開く。

「ボクの名は『Ａｖｉ（アヴィ）』」

「俺は…ナイトだぁぁぁぁ！！」

画面を押すと、走り出す。
左手は、もう動かない。
腹部も痛い。
上手く走れない。

でも、殺らなきゃ……殺られる。

「《……6式……ショットッ！！》」

「《二段漸（にだんぎり）――――――――――ッ！！！》」

17面の層は多大な爆音と共に勝負は終わった。

□■□■

「……」

１７面の層に立っていた人物は……

「けッ。今のコイツじゃまったく面白くねぇな」

白髪の狙撃手――アヴィだった。

アヴィは首を曲げると、拳銃を懐にしまう。

それにしても……

「ボクのＨＰをこんなに減らすとは…いい度胸してんじゃねぇか」

アヴィは自分のＨＰが書いてある真上を見る。

そこに残されていたＨＰは残り半分だった。

倒れているナイトを見る。

あちらのＨＰは残り７

一発、撃ちこめば死ぬ体力だ。

しかし、アヴィはそれを止めた。

「こんな所で死ぬほど野暮じゃねぇよな」

そう呟くと気絶しているナイトに向かって

「１００面で待ってるぜぇ、ナイトさん」

そう言って次の層へ進んで行った。

微かに聞こえる誰かの声。

それを無視してアヴィは進んだ。

Ｅｐ６　救援（前書き）

今回で第一章は終わりとなります。

引き続き、デッドオブオンラインをお楽しみください。

Ｅｐ６　救援

目を覚ましたら、冷たい床ではなかった。
どこか温かく温もりある――誰かの肌のような…

「……ん」

俺はゆっくりと目を開けると、目の前から誰かが覗いていた。
覗いていた人物は俺が目を開けると、騒ぎ出した。
まだ目と耳が完全に機能していないのか、誰なのか何を喋っているのかわからない。

「……さん……さん」
「……ん」

段々、視界と聴覚そして口も動き始めた。
そして、目の前にいた人とは――――――――

「だ、大丈夫ですか？　ナイトさん！！」
「……ユ、ユイちゃん？」
「は、はい…わかりますか？」
「…な、なんとか」
「よかったぁ……」

胸を降ろすユイちゃん。　しかし、ここはどこだ。
それに、なんで目の前にユイがいるのか皆目見当も付かない。
……しばらく考えて俺はある１つの結論にたどり着いた。

「夢？」

「ゆめぇ！？　ち、違いますよ！！　正真正銘、本物のユイです！！」
「だって…夢じゃなかったら、目の前にユイちゃんなんて…」
すると急に顔を赤く染め始めたユイちゃん。
俺は完全に回っていない脳で首を傾げて考える。
「……お、男の人は……がいいって」
「……ん？」
「お、男の人は膝枕が1番効果があるって……」
ん？　ヒザマクラ？
ひざまくら？
膝枕！！
もしかして……
「…ユ、ユイちゃん…・・・この下って……」
「あ、はい。ユイの膝です」
「純粋（ピュア）すぎるッ！！」
「えぇ――――！？　ど、どうしたんですか！？　いきなり」
流石に心苦しくなって俺は起き上がることにした。
それにしても……
「ここは……」
俺がそう呟くと、さきほどまで膝枕をしていたユイが
「ここは、『輝く猫（シャインキャット）』ギルド本部です」

「……輝く猫？」
「はい。半年前にナイトさんが紹介してくれた……」
「あぁ、あそこか。ギルド名まで聞かなかったからわかんなかったわ」
「そうですか……」

□■□■

俺は起き上がると、ユイちゃんから全部聞いた。
実に半年ぶりの再開だが、そんな余韻に浸るわけにはいかなかった。
あの後の事を…

「ナイトさん…驚いちゃいましたよ。倒れてたんですから！！　しかもＨＰ７で」
「あれは…よくわかんねぇ敵だった」
「そ、そうなんですか？」
「うん…こんな最初の場所であんなにレベルが高い奴なんてそういないだろ」
「そいつぁ、恐らくＰＫだな」
「……ロ、ロックさん！！」
「ロック？」
「輝く猫のリーダーのロックさんです」
「おぉ、俺がロックだ。よろしくな……えっと…」

「ナイトです」
「ナイトか。よろしくな」
「それでＰＫって？」
「ＰＫ（プレイヤーキラー）　人が人を殺す奴らだ」
「たしかに……」

あいつは平然と人を殺していた。
俺の攻撃を避けたのは人間もモンスターも初めてと言っていたから、恐らくもう何十人もの人を殺しているんだろう。

「狂ってるんだ。そいつらは…」

ロックはそう呟く。俺は壁に立てかけてあった自分の剣を持つと、画面を開いた。

「助けてくれたお礼です。丁度、持ち物限界数に達していたので…」
「い、いや。ユイは……あの時のお礼のお返しなので……」
「俺もいらん。勝手にやったまでだ」
「……そうですか」

俺は指を鳴らすと、画面を消した。
そして、俺は2人に礼をするとギルドを出た。

「な、ナイトさん！？」
「ん？」
「ユ、ユイと一緒にこ、このギルドに入りませんか？」

それはユイからの誘いだった。
しかし、俺の答えはとうの前に決まっていた。

「俺はギルドに入る気はないよ」
「な、なんで入らないんですか！！　確実に1人より大勢の方が……」
「そこがいけないんだ。俺のこの半年は無駄だった……」
「何があったんですか」
「ユイちゃんに言うような野暮なもんじゃねぇよ」

俺はそう言うと、画面をだした。

「ユイちゃん…」
「はい」
「俺になんて、付きまとわないでしっかりとした人の所で過ごして方がいいと思うよ」
「……ユイはナイトさんに初めて…プレイヤーとして仲良く接してもらいました。それは今も変わりません――――だから、ユイはナイトさんを追い続けます」
「そう……おい。ロック」
「ん？　どうした、ナイト」
「ユイちゃんを……頼んだぞ」
「言われなくとも…ユイはもう我々の一因だ。簡単に殺させはしないさ」
「そうかい…じゃぁな。転送扉（ワープゲート）　15層　《アイマール》」

俺はユイちゃんとロックの姿が見えなくなるまでその街を見ていた。
俺はこの半年間で何も変わらなかった。
壊しちまったんだよ・・・・・・・・・大切だったものを

そして、時は過ぎて2年後まで話は進む。

Ｅｐ６　救援（後書き）

飛躍しすぎましたかね？

年明けに合わせて２年後にしてみたんですが

なにか、不審な点とかございましたら言ってください。

そして、次回からは第二章の始まりです。

話は進んで２年後。

Ｅｐ7　２年後の姿（前書き）

みなさん、あけましておめでとうございます。

いきなりですが２年後のお話です。

この２年間の間の物語はその内書いていくつもりですのでよろしく！！

EP7　2年後の姿

冒頭から、こんなに暗い話題になることをお許し願いたい。
結局、2年経っても『D（デッドオブオンライン）O　O』（これが略称）からは出られていない。

2年間で進んだ面は72面
この順調からしていけば、後2年後くらいにはクリアできるんじゃないかと思うかもしれないがそれは間違っている。

最初にテストユーザーとして参加した人達は全員でおよそ2万人対して、2年後今日現在で生き残っているユーザーは8千人だ。
すなわち、この2年間で1万2千人のユーザーは死んでいるのだ。

さらに言うと、この1万2千人の内　2千人弱の人達はPK（プレイヤーキラー）に殺されている。
とても、残酷だ。

俺はアヴィと言う、白髪の狙撃手に出会い、ユイに助けて貰ってその後は着実に淡々と
面をクリアしていき、何時しか　ユーザーは俺の事をこう呼ぶようになった。
チート級の12人の1人の俺の名前をNight（ナイト）と騎士（ナイト）に文字って
漆黒の騎士（ブラックナイト）

□■□■

俺は只今、４７層の大自然漂う《グリーンパーク》にいた。
理由は簡単。
野暮用だ。

「それにしても……疲れるな……この森」

・・・・
ある人物に頼まれて、この森まで来たのはいいのだが、その人とはぐれてしまった。

「俺、【散策スキル】上げてねぇから、ヘタしたらこのまま餓死するかも……」

そんな縁起でもないことを簿いていた俺の目の前にモンスターが現れた。
たしか……名前は……
「なんだっけ？　あ！！　思い出した。《キング・タウロス》だ」

目の前にはタウロス――――牛頭人身の王冠を被ったモンスターだ。
そう呟いていると、《キング・タウロス》は鼻息を粗く上げ、こちらに向かって突進してきた。

「……しゃぁねぇな。やってやっか」

今にも魂が口の中から出てきそうなへこたれた声で俺はそう言うと、左腰に指してある剣を抜いた。
俺の剣は1年ほど前にある刀鍛冶に作って貰ったオーダーメイドである。

剣を構えて、足に力を入れる。

「ギャァァァァァァッ」

《キング・タウロス》の鳴き声が森に響き渡った。
俺は画面を開き、ボタンを押す。

「――――――――二段斬ッ！！！！！」

《キング・タウロス》は、俺の横を駆け抜けるように走っていくと、そのままの勢いでキラキラと欠片になって消えた。
俺は《キング・タウロス》が消えたことを確認すると、剣を腰に戻す。
そして、俺は大きな欠伸をした。

「……まったく、どこ行ったんだよ」

そう呟くと、俺は再び森の中へ入って行った。

□■□■

結局、半日に渡って《グリーンパーク》を散策したのだが結局見つからなかった。
俺はため息を付きながら自分の借家である５０層へと飛んだ。

「はあ――。眠い……」

欠伸をしながら、部屋の扉を開けた。

「あ、ナイトさん。おかえりなさいです」
「ん？　あ、ただいま――――って！？　なんでユイがいんだ？」
「少し、この層に用事があったのでナイトさんに挨拶をと思いまして」
「うん。それはわかったけど、何故俺の家の鍵を？」
「それは……秘密ですっ！！！」

うわぁーこの子１番謎な部分を隠しやがったよ。
俺は剣を置くと、椅子に座った。
隣にはユイがちょこんと申し訳なさそうに立っている。

「まったく変わんないな、ユイは」
「も――。いつまでも子ども扱いしないでくださいよ。もう十分大人ですッ！！」
「それで、大人かぁ……ちょっと無理があるね」
「うぅぅ……やっぱり、そう思いますか」

ユイは下を向いた。
この2年間、偶にユイには会っていたが背丈も何もかも2年前と、同じだった。
それとも、ゲームの中ではやっぱり成長しないってことなのか？

「ナイトさんだって、全く変わってないですよ！！」
「俺はいつまでも、このままの方がいいんだよ」

俺はそう言って少し優越感を味わった。
ユイは相変わらず、小学6年みたいな背丈で変わらず黄色髪のツインテールであった。
それでも、この2年で2人共随分変わったと思う。
外見は変わってなくとも、内面は何歳も上である。
そんな気もしなくはない。

「ユイ、ロックさんは元気か？」
「はい。ロックさんもギルドの全員、元気に生き残っています！！」
「……そうか。珍しいよな、ギルド全員で生き残ってるっていうのは」
「そうですね。昔から関わり合ったギルドは次々無くなっています」
ユイの入っているギルド『輝く猫（シャインキャット）』のメンバー誰1人欠けずにここまで来ている。ある意味、凄い。それも、ロックの強さのおかげ

かもしれない。

「それで用事ってのは終わったのか？」

「え、いえ……それがまだ終わってなくて……」

ユイは手をモジモジとし始めた。

俺は首を傾げる。

「あ、あの……」

「ん？」

「この層に、『雷閃（らいせん）』って呼ばれている人がいるって聞いたんですけど…」

「……ん？　雷閃ねぇ」

「知りませんか？」

「いや、知ってるには、知ってるよ」

「そうですか！！　なら、教えて欲しんですけど」

「いいけど、その『雷閃』にどんな用事なの？」

「それは……まぁ後々」

「後々ねぇ……」

俺はそう呟くと、イスから立ち上がりユイの頭を撫でる。

ユイは少し抵抗があったようだが、しばらくすると安楽の顔を見せた。

「いいだろう。明日、行ってみるか」

「え！？　いいんですか！！！」

「うん。どうせ、明日　そいつに用があるからな」

「ありがとうございます」

ユイは深々と頭を下げる。

俺は『いいよ、別に』と言うと、ユイは頭を上げた。

「では、明日　ここに来ますね」
「ん。それはいいけど、もう遅いから家に泊まっていくといいよ」
「ふぇっ！？　いいんですかっ！！！」
「うん。部屋は余ってるし、ユイがいいならだけど」
「いいです！！　超いいです！！　むしろ、最初からそう仕向けようと思っていました！！」
「……最後の言葉が妙に気になるのは俺だけか？」

ユイはなんか妙に嬉しがっている。
宿代が浮いたからかな？
と、いうより2年間の間に性格変わった気がする。

そんなことは置いといて、俺は料理を作る為にキッチンへと立った。
今日は、久しぶりに俺の手料理を披露しよう。

Ｅｐ８　雷閃（前書き）

＞ｉ３８１７６―３８８４＜

※　今回の話と全く関係ありません。

右：椎名　夜宵／Ｎｉｇｈｔ　左；不明／アヴィ

どうですか？　結構頑張って書いてみました。

２ショットです

感想、評価、誤字脱字、指摘などお願いします。

EP8　雷閃

次の日

午前7時丁度にユイの画面からアラームが鳴り響く。
ユイは少し寝ぼけながらアラームを止めると目を擦った。

「……こ、ここは」

目を擦りながら、考える。
しばらく辺りを見渡していると、昨日の事を次第に思い出してくる。

(昨日、ナイトさんの家にお泊りしたんだった)

そう思うと急に顔が赤く染まっていく。
肌白い手で真っ赤に染まった顔を隠した。

しばらくすると、気も落ち着いてきたのか次第に顔は普段の肌白い顔に戻る。
そしてゆっくりとベッドから降りると、朝早く起きた理由も思い出す。

「そうだった。ナイトさんの寝顔を見に行かなくてわ！！」

ユイはそう呟くと、音を立てないようにドアを開いた。
目の前のソファーには毛布1枚で横になっているナイトの姿があった。
それを見たユイは少し心苦しくなる。

「……ユイの為にソファーで寝ているなんて……」

胸をぎゅっと抑える。

しかし、実際は違う。

ナイトはベットで寝るより、ソファーで寝た方がいい派なだけである。

だから、妙に小奇麗なベッドの納得も良くと言う事。

しかし、ユイは気づいていなかった。

ユイはそっとナイトに近づくと座って、顔を眺めた。

じーっと、何時間にも思えたし何分にも思っただろう。

ほわわぁぁっとユイは朗らかな気持ちになり終えた。

そして、時間は8時。

ナイトの画面が開いてアラームが鳴った。

ナイトは上半身を上げると、ユイの方を見て目をぱちくりと瞬きする。

しばらくすると、思い出したかのようにユイの頭を撫でる。

「おはよう……ユイ」

「おはようございます。ナイトさん」

こうして、1人の少女の数少ない楽しみが1つ増えた瞬間だった。

□■□■

俺とユイは今、ある所にいる。
そう、最強ギルドの『ノエル』の第1支部である。
ここには『雷閃』と呼ばれる人がいる。　ってか、俺の知り合いだ。

「ここにいるんですね……」
「ん、まぁ。ここにいなきゃ、あそこにいるんだろうけどな」
「あそこってどこですか？」
「ここにいなかったら、教えてやるよ」

俺はそう告げると、第1支部のドアを4度ノックする。
しばらくすると、ドアがゆっくり開いた。

「……何すか？」
「ん。あぁ、ここの支部長に会いたいんだけど」
「……予約は？」
「ん。してない」
「なら、事前に行ってから来てください。隊長は向こう3日、仕事で――――」
「あ――。君、君。その人はいいから通してください」

と、ドアの向こうから声が聞こえた。
俺は少しドヤ顔風になるとドアから出て来た男は舌打ちをして俺とユイを通す。

「悪いな。門番さん」
「俺は門番じゃない。支部長の護衛だ」
「護衛が護られてんじゃねぇのか？　逆に」
「……殺るきか？　お前」
「いいぜ。いくらでも相手してやんよ」

俺と門番がメンチを切り合うと、後ろに居たユイが服をそっとつかんでくる。

「ナイトさん……行きましょう」
「ん。あ、悪い、悪い。行こう」

門番を押しのけて、俺とユイは中へ入って行った。
この門番が後に俺にどうはだかるか、俺はまだ知らないし、知りたくもない。

□■□■

支部長の部屋の前まで着くと『おーい、入るぞ』と言いながら部屋に入る。

「「……」」

硬直した。
なんで、人を招いておいてそいつが――――――――
着替えているのか。

「雷閃って女の人だったんですか」
「いや、今そんな状況じゃない。ヘタしたら俺死ぬ」
プルプルと肩を震わせて顔を真っ赤にする『雷閃』
そして、画面をゆっくりと開くと思いっきり叩いた。
その間に俺はユイに
「ユイ、【防御スキル】最大だったよな……今すぐ、守っとけ」
「え……あ、はい」
ユイは言うがまま画面を開いて【防御スキル】を使った。
俺は出来るだけ、ユイから離れて部屋を脱出し走った。
「死になさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁい！！！」
『雷閃』の右手から、雷が飛び出して行き部屋を出て行った雷は
誰かを捉えた。
「ぎぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！」

その声は紛れもなく、俺だった。

□■□■

「俺の唯一のチャームポイントである色白の肌が少し黒くなっただろ？」
「いいじゃない、少しダンディーになったわよ」
「なんで俺の路線がオヤジ系なんだよ」

俺は少し焦げた頬を少し気にしながら話を進める。

「で、今日来た理由は何かしら？　まさか、昨日のあれ？」
「昨日のあれってなんですか？」
「あぁ、こいつ。昨日、森の中で迷って俺を見捨てたんだよ」
「見捨ててなんかいないわよ。アンタが急にいなくなるんじゃない。『あそこに、希少種のモンスターがいるからちょっと狩ってくるって』」
「まぁ、言ったけどさぁ……」

俺は少し、縮こまる。
対して、『雷閃』はドヤ顔風になって、俺に近づいてくる。

「なら、私に詫びてよ」
「ゴメンナサイ」
「あ、あの……そろそろ、本題いいですか？」
「あ、ごめんね。ナイトくん弄るの楽しいから」
「お前、実はドSだろ？」

いたっ！！　殴られた。
俺は頬を摩りながら2人との話を訊く。

「率直に言いますと、次の層。75面にいるボスを一緒に退治してほしいんです」
「……いいけど。私達『ノエル』は全面的に動かないわよ」
「いいんですよ。私は『アナタ』に言っているんですから」

ユイのその言葉は妙に力強かった。
俺はその横で頬を摩っている。
『雷閃』はうんうんと頷くと

「で、ナイトくんは行くのかな？」
「ん。いいけど、まだ死にたくないんだけど」
「……大丈夫よ。私が護ってあげるから」
「ユ、ユイもナイトさんを守ります！！」
「――いや、冗談だから」

沈黙。
まぁ、いいけど。

「そうとなると……後、2人くらいは必要ね。主に戦闘系で」
「援護はユイがやってくれるからいいけど、今回のボスは結構厄介

って訊いてるしな」
「援護なら、任せてください！！」
俺達はしばらく考えると、俺はある人物2人の事を思い出して話をする。
「あ、いい奴2人いた」
「え？　ほんと、それ？」
「ん。あぁ、俺達と同じ位のレベルで戦闘系だろ？　なら適材適所な奴がいる」
「へぇ～。それって私も会ったことある？」
「ん――――。たぶんないと思う。最後にあったのお前と会う前だし」
「そんな人、まだ生きてるの？」
「大丈夫だろう。片方はともかく、もう1人は俺と張り合っている奴だからな」
「そうなんだ……」
「では、その2人に連絡をしてみましょう！！」
「そうするかな……」
俺はそう言うと、画面（ディスプレイ）を開いた。

Ｅｐ８　雷閃（後書き）

さぁ、次回は新キャラ登場か？

感想、誤字脱字などなどお待ちしております。

EP9　対決（前書き）

感想、誤字脱字、評価、指摘をお願いします。

EP9　対決

俺は協力をしてくれると思う2人に連絡を取って第1支部をでる。

「ふっ。もう話は終わったのか」

「ん。誰だ、アンタ」

第1支部の門の前に誰かがいた。

あぁ、護衛の人か。すっかり忘れてた。

「俺は護衛のナイズだ。覚えておけ、この常識知らずが！！」

「ん。俺、人の名前、覚えるの苦手だから……でも、アンタは俺の名前によく似てるから覚えやすいな」

「似てる？　ナイズにか？」

「ん。俺の名前は――――――――」

俺が名前を言おうとした時。

第1支部の方からユイと『雷閃』がやってきた。

「お――い！！　ナイトく――ん」

「ナイトさん。歩くの速いですよぉ」

へとへとになりながら走ってくるユイと手を振りながら走ってくる『雷閃』

すると、護衛は首を傾げて俺に問いかける。

「お前の名前って」

「あぁ、俺はナイトだ。じゃぁな、護衛さん」

そう言って、俺は門をでた。
ユイはしばらくすると、俺の隣に着いて歩きはじめる。
しかし、いつまで経っても『雷閃』は来なかった。
「あいつ、何やってんだ？」
「どうやら護衛の人に捕まってしまったようです」
後ろを向くと、護衛と『雷閃』が少しもめているようだった。
「私は大丈夫だって！！」
「しかし、私は護衛なのでご一緒させてもらわないと……」
「だから私は大丈夫だから、いざとなったら助けてくれる人もいるし」
そう言って、俺の方を指差す。
ん？　何故、俺の方に指を指した。
「知りませんよ。あんな、見るからに弱そうな奴。良く生き残っていましたね、今まで」
「むー。ナイトくんの力を知らないとはアナタもここの常識がないようだね」
「知りませんよ。あんな黒ずくめの男」
「なら、ナイトくんと『対決』しなさい！！」
「はぁ？」
「ナイトくんと『対決』して、勝った方が護衛に着く。それなら納得いくでしょう」
「……しかし」
「『対決』しないんなら、護衛は解任。ナイトくんに護ってもらいます！！」
「……わかりました。ですが、殺しても知りませんよ」

「ふふ……アナタはそんな心配をしなくて結構。自分が死なないようにしてればいい」
「？」

やけに『雷閃』は上機嫌だ。

「ナイトくん」
「ん？」
「いきなりだけど、この人と『対決』してくれないかな？」
「……嫌だ」
「つれないなぁ。この人がナイトくんと戦って護衛に適しているか判断したいんだって」
「俺は護衛なんてまっぴらごめんだね。自分で行けるだろ」
「十分いけるけど、この人、ノエルの隊長から派遣された人だから融通が利かなくて」

ノエルの隊長か……
また、めんどうな奴が絡んでんな。

「……お願いっ！！　ユイちゃんの為にも」
「なんで、ユイが出てくるんだよ」
「だってぇ、ユイちゃんがお願いした頼み事だしぃ」
「お願いしますっ！！　ナイトさんッ！！」

ユイも何故か、頼み込んでいる。
なんだよ、この状況。

「ふ、やっぱりこいつザコプレイヤーじゃないか」

と、護衛が1言俺にも聞こえるように言ってきた。

俺は、はぁぁ、と堕落のため息を付くと『雷閃』に言う。

「なに。勝負方法は？」

「受けてくれるの！？」

「あぁ、話が進まんねんじゃ意味がねぇからな。それに人待たせてるから」

「ありがと――。ナイトくんっ！！」

『雷閃』はそう言うと、勝負方法を説明する。

勝負方法は『どちらかが、降参と言うまで』か『先に地面に手を付いた方の負け』

街の中でのプレイヤー同士の戦いは珍しくない。

しかし、街の中ではプレイヤーは絶対に死なない。

プレイヤー対プレイヤーは絶対にＨＰ１で踏みとどまる。

「いんですか？　こんなよわっちい奴と……すぐに終わりますよ」

「ナイトさん、あんなこと言われてますけど？」

「ん。いんじゃない？　言わせておけば」

□■□■

所変わって、中央広場。
『対決』とあって野次馬も多い。
ってか、こんなにこの街にいたんだな。
気づかなかった。

「いいのか。止めるなら、今の内だぞ」
「ん。大丈夫、大丈夫」

護衛は『剣』らしい。
俺と同じタイプだが、持っている剣は結構レベルの低い剣だった。
俺は剣を抜こうと腰に手を掛けるが――――

「あ、剣忘れた」
「「「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」」」

会場中が一斉に叫んだ。
俺は頭を掻きながら、画面を開いた。

「あぁ、家に置いてきたわ」
「ユイが取りに行ってきます！！」
「ん。ありがと」
「どうすんのよ。アンタの家、結構遠いんでしょ？」
「ん。この街の入り組んだ場所にある」
「しょうがない、待っててやる」

護衛は剣を降ろして、余裕の表情。
俺は『雷閃』の方を見ると、指を指した。

「あ、それでいいや」
「えぇ！？　これ？」

指を指したのは『雷閃』の使っている『剣』
たしか、名前は……忘れた。

「ん。それでいいや」
「ナイトくんがいいなら。いいけど」

そういって『雷閃』は俺に剣を投げる。
俺はキャッチすると鞘を抜いた。

「いいのかよ。他人の剣で……」
「ん。いいよ。アンタを倒すぐらい、どんな剣でも大丈夫だ」
「……そうかい、そうかい」

そして、『雷閃』は中央に立つと手を挙げた。

「勝負――――――――――――――――――――初めッ！！！」

その言葉と同時に護衛は俺に向かって飛び込んできた。

□■□■

キンキンと剣と剣が弾きあう音が響く。
護衛はどんどん迫りながら、剣で斬りつけてくる。
俺はその攻撃を全て弾いた。

「中々、やんじゃねぇか。素人プレイヤーの癖に」
「あれだろ。アンタ、序盤でやられるキャラだろ」

戦っている最中によく話す敵は真っ先に死ぬ原理。

「なんだとぉぉぉぉぉ！！」

縦横無塵に斬りつけてくる護衛の剣筋を全て見えているかの如く避ける。
まぁ、実際見えてんだけどさ。

「はぁ…はぁ…」
「おいおい、まだ始まって5分も経ってねぇぞ」
「お前、何時まで逃げてれば気が済むんだ。そんなんじゃ、いつまでも終わらねぇぞ」
「んゃ　逃げてないから。アンタがどれだけ凄い奴か見てみたかっただけ――――まぁ、実際そんなに強くないな。お前。俺が最初に言った事は強ち間違ってなかったよ」

その言葉でカチンと来たのか、護衛は画面を開いて叩いた。
その途端、護衛の剣が炎を纏い始める。

「へへ、どうだい。俺の魔法と剣の合成技わぁ。びびっちまったか。ははッ」

「……」
「どうした？　今なら、土下座して謝ればまだ許してやるぜ」
「んゃ。お前、やっぱ弱いな」
「んだと、ごらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

広い中央広場の端と端。
野次馬の手前と手前で話していた俺と護衛。
護衛は怒り狂ったかのように飛び出してくる。
（この剣だと、最悪砕けちまうから使えねぇんだよなぁ）
俺はそう言って迫りくる護衛を眺める。
距離にして、約５０ｍ
迫りくる炎の剣は次第に大きくなっていく。
俺は画面を開いて、あるボタンを押そうとした時。

「ナイトさぁぁぁん！！　受け取ってくださぁぁぁぁぁい！！！」

聞きなれた声と共に俺の剣が目の前に刺さる。
俺は『雷閃』の剣を横に置くと、自分の剣を抜いた。
そして、画面を思いっきり叩いた。
「いくら死なないからって言っても、これはちょいと痛いぜ！！」

「くらえぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

俺は護衛に向かって、走り出した。

そして、丁度中央の大きな円が描いてある場所で交じり合った。

「炎上漸――――――――――――――ッ！！！」

「――――――――――――――――ッ！！！」

俺は護衛の剣をすり抜けて、腹部を剣で斬った。

護衛は次第に足が止まっていき、最後には剣を落として地面へ倒れこんだ。

ＨＰは残り１で止まっている。

その瞬間、歓声と共に俺の勝利がやってきた。

□■□■

俺は剣をしまいこむと、倒れこんでいる護衛の方へ向く。
「じゃ、悪いけど、カナは借りてくからな」
「く……」
護衛は悔しさのあまり、地面を殴る。
俺はそれを見ないように2人の元へと向かった。
「なんなの、最後のあれ？」
「なんか、黒い物がばぁぁッて！！」
「ん。あぁ、あれは俺の【隠しスキル】だよ」
「【隠しスキル】！？」
「ん。説明すんのはめんどうだから、またその内な」
「まぁ、別にいいけど」
広場から出ようとすると護衛の男は立ち上がって俺に向かって叫んでくる。
「素人プレイヤーの癖に『ノエル』に刃向う気か！！」
「ん。別に刃向ってはないけど」
「ちょっと、アナタ。それ以上は――――」
「てめぇが俺に勝てるはずねぇだろうが！！　バグだ！！　そうだ、それかインチキだろ！！」
「ん。アンタがそれで納得するなら、それで解釈しときなよ」
「――――ッ。さっきから、上から目線でうぜぇぇぇんだよぉぉぉぉ！！！」
剣を拾い上げてこちらに向かって走ってくる。
俺はふあぁぁぁと欠伸をすると――――――――――

「ぐぁぁぁぁぁぁッ！！！」

———目の前にいた護衛が謎の炎に包まれた。

「えぇ！？　どうなってんの？」

「まったく、君と言う奴は約束の1つも守れないのかい？」
「肯定します。待っている間のパフェ代どうしてくれるんですか？」
「……いや、それは僕が払ったんだけどね———まぁ、後で君に請求でもするよ」
「んぁ。悪い、悪い。ちょっと厄介事で」
「で、この君に剣を向けていた男は誰なんだい？　あぁ、またストーカーかい？」
「恋愛のもつれから起こる三角関係でいつも被害に会っていますね、ナイト。まったくつくづく面白い人ですね」

中央広場に突如現れた2人組。
会場中は絶句している。

「ナイトくん……この2人は？」
「あぁ、この2人が今回協力してくれる奴らだ」
「奴らって……まぁ、僕らの関係なんてそんなもんなのかな」
「否定します。私はナイトの事をそんな風に思っていません」
「……僕だけか」

現れた2人は一通りコントのような会話を終えると俺に1言

「さて、早く行こうか『漆黒の騎士(ブラックナイト)』」

「だから、その名前で呼ぶなっつんだろ」

俺とユイとカナは2人の方へ駆け寄ると人込みをかき分けて広場を後にした。

□■□■

「おいおい、あの黒マントの男って……」

「噂の『漆黒の騎士』だったのか」

「噂だと、ごっついゴリラのような奴だって聞いてたけど」

5人が去った広場ではザワザワとなっていた。

そんな『漆黒の騎士』に立ち向かって見事に敗北した護衛は倒れていた。

数十分もすると広場には人がいなくなり、護衛だけとなった。

「くっそ……」

声を漏らすが、立ち上がる気配はない。
倒れている護衛に誰かが近づいてくる。

「……なんだよ。笑いに来たのか？」
「……我々はそんな事は致しません。ただ――――」
「ただ？」
「アナタ、『漆黒の騎士』に勝ちたいですか？」
「当たり前だろ」
「今まで、『雷閃』を独り占めしていたアナタの元から去って行ってしまった……これはいい『エネルギー』になる」
「エネルギー？」
「……なんでもありません。では、これをお飲みください」
「な、なんだこれは？」
「ただの薬ですよ。……ただし、非合法的に作られた物ですが」
「（ごくっ）……ぐ……ぐがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
「く……はははは。失礼ですが、アナタの名前は」
「――――――ナイズだ！！」
「……そうですか。では、ナイズ。行きましょう」

経った今まで広場で火だるまになっていた護衛の姿はもう無い。
1人の奇術師も、そこにはいなかった。

『デッドオブオンライン』の謎はまだ多い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9155z/

デッドオブオンライン

2012年1月5日18時57分発行